

## 国を超え尽くしてくれた 難病のトルコ人 名大病院で手術

### 二村教授ら治療 きょう帰国の途

肝臓でつくられる胆汁を十二指腸まで導く胆管に腫瘍(しゅよう)ができる胆管がんの一つで難病の「肝門部胆管がん」にかかったトルコ人男性が、名古屋大病院(名古屋市昭和区)で二村雄次教授(60)らの治療を受け、無事に手術を終えて回復。二十六日、三カ月ぶりに帰国の途に就く。(池田千晶)

男性はメミッシュ・ベクメツツイさん(70)。三月に発症し地元の病院で検査を受けたが、手術は困難とされた。メミッシュさんの跡を継いで靴下製造会社を経営し、世界各地を飛び回る息子のアーメットさん(44)が、知人らを通じて世界中の病院を探し回った結果、実績のある名大病院で手術を受けることを決意。四月下旬に妻マリアンさん(69)とともに来日した。

胆管がんは、腫瘍で胆管が詰まり、胆汁が流れなくなる病気。特に胆管が出入りする肝臓背面の肝門部胆管がんの手術は、がんの中でも最も難しいといわれる。二村教授は約二十五年前から取り組み、既に約二百四十例と世界一の実績を誇る。

黄疸(おうだん)がなかなか引かず、手術まで二カ月を要した。その間、息子や孫たちが代わる代わる訪問。家族を大事にする姿が院内でも話題となった。

二村教授は「十五時間を超える難しい手術だったが、何とか期待に応えられた」と笑顔。メミッシュさんは「高熱と黄疸に苦しんだが、日本にきて本当によかった。人種や国の違いを超えて尽くしてくれた医療チームの皆さんと出会えたこともうれしい」とすっかり血色がよくなった顔で話した。